（2024年12月22日発行）

W.A.Mozart Hiroba

「モォツァルト広場」 SINCE 1995

第52最終号

《救いのピアノ》秘話

モーツァルトへの手紙（最終稿）

会員番号　K.618　**加　藤　　明**

最終稿の執筆にあって様々な思いが沸き起こる事態となり、整理不能のまま二ヶ月が経過。

今でも、これまでの都度々の執筆内容に恥じ入る感情を消せずにいる小生がおります。

「モーツァルトへの手紙」を綴るという行為の背後には、小生なりに「日常の生活を通して己の内なるモーツァルトを想い描いてみたいものだ」という野心があった筈でしたが・・・。

こうして、本稿は今回で実に52篇目の駄文を弄することになったわけです。

さて、最終稿は「モォツァルト広場」を語る上で欠くことのできない多くのご支援くださった諸兄や会友の中から、いまや日本を代表するピアニストの一人、久元祐子さんとの恐れおおい「奇遇」に焦点を絞って想い出などを綴りながら幕引きを図りたいと思います。

1997年（平成９年）７月に「モォツァルト広場」のサマーコンサートが船出しました。

「広場の例会」創設から３年目の夏のことでした。

当時12名を数えた幹事諸兄の尽力により、どうにか翌年の第２回までは首尾よく開かれ、好評価のサマーコンサートでしたが、この２回目を終えた後、「次回はどうしようかなあ・・?」という深刻な課題が幹事会で取りざたされました。

何故なら、この先の見通しとして、地元の演奏家の皆さんだけに頼るには厳しい状況であることが明白だったからでした。

そんな状況のなか、1998年の秋に当時アトリオンの一階にあった本屋さんで偶然小生の眼に留まったのが、【モーツァルトのクラヴィーア音楽探訪】（音楽之友社）という一目で興味をそそられる初版の単行本でした。

著者の名は久元祐子。

初めてのお名前でしたが、興味津々しばし立ち読みしてしまいました。

そして、その著者の執筆の趣旨が納得できたことや新進気鋭の東京芸大（ピアノ専攻）卒業

の才媛（若々しくフレッシュな笑顔の写真が気に入る！）ということから早速その場で買い求め、じっくり読ませていただきました。

読み終えた感想は、歌も唄えず楽譜も読めない小生にも、著者久元祐子の考えがス～っと頭に入る平明な文章ということもあり、正に「ピアノ曲にこだわった得難いモーツァルトの入門書」という印象でした。

それは、この書に網羅されたピアノ曲を通して、モーツァルトワールドへの新たな光明を感じ取ることができた極めて貴にして重い体験でした。

早速、幹事会でこの本の話を披露したところ、「久元祐子は《朝日カルチャースクール》でモーツァルトのピアノレクチャーを連続的に行っているよ」、という話を幹事の仲間が言いだして、随分著者のことで盛り上がったのでした。

「よし、じゃあ、次回のカルチャースクールにこちらから押しかけて、サマコンに来てもらえるものかどうか、お願いしてみよう！」。

この代表の興奮気味の意志表明にみんなが賛同したことから、代表が直近の横浜での「久元祐子レクチャースクール」に参加し、その場でご本人に直接打診することになったという次第でした。

◆

1999年（平成10年）の二月、横浜で開かれた「レクチャースクール」に勇んで参席しました。

そして、いよいよ「レクチャースクール」終了後に、こちらの意向を聞いて下さることとなり、コーヒーを飲みながら、【モーツァルトのクラヴィーア音楽探訪】を著した才媛、久元祐子さんと初対面での話し合いが始まりました。

レクチヤースクール終了後のサイン会にいらした久元女史に、小生が焦ってお話しようと声をかけたところ、目の前においでの青年が優先だったので「こちらの方が先ですので、お待ちください」と女史に制される醜態を演じてしまったのでした。どれほど小生がアップアップな心境だったのか、いまでもあの時の気恥ずかしい光景が目に浮かびます。（苦笑）

こちらは胸はドキドキ喉もカラカラの緊張の体で、一方的に「モォツァルト広場」創設の趣旨や運営の実情をお伝えし、厚かましくも久元さんに是非秋田にお越しいただきたい旨の熱い思いをまくしたてたように記憶しています。

久元女史は終始にこやかながらも落ち着いた表情でこちらの熱い思いを聴いてくださいました（モーツァルト病患者が遠路はるばる来てくれたのね・・と思われたかも）。

そして、こちらからの招聘の依頼に対し、その場でご承諾下さったのでした。

小生は驚きと嬉しさで内心「ヤッター！」と童心に帰って跳びあがりましたが、それは、言わば歓喜のマグマが体内で爆発した武者震いの瞬間でもありました。

その後13年に及ぶ久元女史と「モォツァルト広場」とのモーツァルトを奏でる40曲に及ぶ「秋田ステージ」がこうして実現したことを振り返ると、あの武者震いの瞬間が一層懐かしく思い出されるのです。

この押しかけ対談の成果をいち早く幹事諸兄に会って報告したい衝動のなかで、帰路の電車は上京時より随分のらりくらりで遅い、と感じられたことを忘れることができません。（笑）

◆

こうして、1999年の７月に開かれた第３回のサマーコンサートで初めて久元祐子さんが登場することになりました。

この折に、会員の証であるk.番号をお持ちいただくようお願いをしたところ、「モォツァルト広場」初演の協奏曲「ジュノム」の271番を

選ばれたことも、如何にも久元さんらしい心遣いとウィットが感じられる嬉しい一コマでした。

「モォツァルト広場　名誉会員　久元祐子」の誕生でした。

この記念の「ジュノム」初演から実に13年間、久元祐子さんは７月となると、天から舞い降りる織姫の如く秋田に来られ、多くのファンを愉しませて下さいました。

当然のことながら、久元女史にまつわる多くのエピソードがありますが、紙面の都合で一つだけ。それは2001年第５回のサマーコンサートにお越しいただいた時のことです。

小生の友人で会員でもあった関清和君が病のためこの年のはじめに昇天してしまいました。

このことを予め久元女史にお伝えし、できたらモーツァルトが友人のハッツフェルトのために書いたk.511の「ロンド　イ短調」を今回演奏していただきたい旨をお願いしました。

久元女史はこの件を丁寧にご承諾くださり、驚くべきことに秋田空港に降りてこられた洋装の色が黒一色のシンプルないで立ちで、小生は女史の心映えの豊かさに至極感動したものでした。

未亡人を前にした当日の「哀しみのロンド」はひときわ深くて美しいものでした。

あの25年前の押しかけ依頼から始まった久元祐子さんと「モォツァルト広場」のご縁ですが、今日まで、２度のアトリオンホールでの協奏曲を含め、延べ14回当地でご出演をいただくという豊穣な実りを得ることができました。久元女史の秋田公演は共演した地元の演奏家はじめ多くのモーツァルト愛好家に又とない素敵な記憶をもたらしてきたことはご承知の通りです。

あのどん詰まりの苦境にあった「モォツァルト広場」に、遠くから救いの手、いや、《救いのピアノ》を差し伸べてくださった久元祐子さんには「モォツァルト広場」最終例会にあたり、心からの敬意と感謝の言葉をお贈りする次第です。

End

追伸

参考までに、久元祐子さんが「モォツァルト広場」で演奏された曲目を列挙します。（順不動）

・ピアノ協奏曲　k.271　k.414　k.488　k.537 k.595（５曲）

・ピアノソナタ　k.331　k.15　k.545　k.311　k.309
k.310　k.280　k.281（８曲）
k.19d　k.501（４手のためのソナタ２曲）
※他に幻想曲・ロンドなど

・ヴァイオリンソナタ
k.454　k.304　k.481　k.377　k.301
k.305　k.296　k.378　k.379（９曲）

・ピアノ三重奏など室内楽
k.452　k.564　k.493　k.498　k.478
k.384（６曲）

織姫：久元祐子さんの「降臨」がなくなった年、第15回サマーコンサートのメンバーの記念写真

特　別　寄　稿

名誉会員　**久　元　祐　子**

「モォツァルト広場」・・・「広場」という響きの持つワクワク感は、モーツァルトの音楽そのもの。広場に吹くそよ風は心地よく、葉ずえの音、鳥の鳴き声、ディヴェルティメントがどこからともなく聞こえてきて、夕暮れ時になると街の人々が集い、そぞろ歩き、お喋りに興じる。ヨーロッパには「広場」がたくさんあり、ベネツィア、ウィーン、パリなどモーツァルトが訪れた様々な都市には、必ず教会と広場がありました。当時は馬車が走り、石畳を馬の蹄鉄の音が響いていたことでしょう。この「モォツァルト広場」を命名された加藤明代表と初めて出会ってからあっという間に30年になります。モーツァルトではなくモォツァルト。小林秀雄著『モオツアルト』を愛読してこられた加藤さんらしい命名です。加藤さんが読破されてきた、ありとあらゆるモーツァルト関連の書籍の豊かさには、脱帽です。加藤さんには、なんでも遠慮なく言えてしまうところがあり、論戦になった時もありましたが、そんなことも含め、演奏会後の意見交換は楽しいひとときでした。

最初に出演させていただいたのは、サマー・コンサートでの『ジュノム』。それ以来、秋田は、私にとって大好きな「モーツァルトの街」になりました。最初に秋田空港に車で迎えに来てくださった加藤さんの助手席に乗り込んだ瞬間、前の車のナンバーを見て「オレこの曲好きなのよ。」とＫＶ番号に見立てたナンバーで曲を諳んじておられることに驚愕。趣味を超え、モーツァルト命！というその情熱は、ずうっと変わらず。若さの秘訣はおそらくモーツァルトでしょう。温泉に行っても好きなＫＶ番号の下駄箱があくまで靴を脱がない、など加藤さんのエピソードの数々は、私がこれまで全国各地で行ってきたモーツァルトのトーク・コンサートでもご紹介させていただき、毎回会場を笑いの渦に巻き込んできました。加藤さんは、人に笑いと幸せをもたらすパパゲーノ！

モォツァルト広場では、星空のような天井の下で弦楽、管楽、声楽、連弾など様々なジャンルでアンサンブルをさせていただきました。素敵な演奏家の皆様と共演させていただいた時間は、私にとって人生の大切な宝物になっています。

このたび加藤さんから「モォツァルト広場」での演奏の機会を頂戴しましたことは光栄の至りですが、同時に「最終回」という寂しさがこみあげてきました。心の中にモーツァルトの晩年の名作『自動オルガンのためのアンダンテＫＶ616』の旋律が浮かび（涙）。。。

本日「モーツァルト流のコーダにしよう」という加藤さんらしいフィナーレの日がやってきました。今宵は、楽友と奏でさせていただく幸せに感謝しつつ、愛に満ちた優しさで温かく包み込むイ長調のモーツァルトで「モォツァルト広場」最終回の音を響かせたいと思います。ご来場の皆様の心にモォツァルト広場の余韻がいつまでも残りますよう、心を込めて弾かせていただきます。

オペラ「魔笛」の成立（下）
―フリーメーソンとゾロアスター教―

会員番号　K.203　**松　田　至　弘**

＊

「魔笛」は、フライハウス劇場の支配人兼役者のシカネーダーが、「魔法オペラ」という着想のもとに台本を書いた。形式的には、先に述べたようにドイツ語のジングシュピール（歌芝居）である。

それでは、シカネーダーが何から何までただ一人で発想し台本を執筆したのかというと、そうではなかった。シカネーダーは、他人の助けを拒まず、利用できるものは何でも喜んで利用したと言うべきであろう。その点で彼は、抜け目のない人物であった。

今日、モーツァルトを初め、カール・ルートヴィヒ・ギーゼッケなど複数の人物が、台本作成に協力したとする説が有力である。ギーゼッケは、フリーメーソンでモーツァルトと親しい関係にあった。

カール・ルートヴィヒ・ギーゼッケのメダル（イギリスのメダル製作家W.S.モソップの作品）

モーツァルトやギーゼッケ［注］は、ウィーンのフリーメーソン指導者で高名な科学者・鉱物学者のボルンを心から尊敬していた。

モーツァルトはフリーメーソンのための音楽を多数作曲しているが、1785年４月に「真の和合」ロッジで、ボルンの功績と啓蒙君主の皇帝ヨーゼフ２世（在位1765～90）を讃えてカンタータ「フリーメーソンの喜び」（作詞フランツ・ペトラン、K・471）を演奏している。

モーツァルトのカンタータ「フリーメーソンの喜び」（楽譜）のタイトル・ページ

このような関係にあったことから、ボルンがモーツァルトに、機関紙『フリーメーソン・ジャーナル』に載せた自身の論文「エジプトの秘儀について」（1784年）やフランスの神父・小説家ジャン・テラッソンの小説『セトス―古代エジプトの記念碑的な逸話からの物語、あるいは生涯』（1731年、ドイツ語訳1778年）について説明し、実際にそれを読むよう強く薦めたことは十分に考えられることである。

ボルンは、古代エジプトの叡智、秘儀や倫理

イグナーツ・フォン・ボルンの肖像、作者不詳、ウィーン自然史博物館蔵

をフリーメーソンの教えや儀礼に結びつけ、それらを通して啓蒙主義を浸透・高揚させようとしたのであった。この二つの文献とボルンの考えが、「魔笛」を完成させるに当たって大きな影響を与えたことは間違いない事実である。

*

ところで、シカネーダーが初めに考えた「魔笛」のストーリーは、主人公のある王子が良い妖精の女王と出会い、娘（王女）の肖像を見せられ、悪い魔法使いに誘拐されてその城にとらわれているので救ってほしいと頼まれる。王子は困難に遭遇しながらも、魔法の笛のおかげで王女を救い出すことに成功し、二人は幸せに結ばれるというものであった。

このありふれたおとぎ話に対して、モーツァルトはオペラの制作過程のどこかで、「フリーメーソンの寓意物語にすることを提案した」（キャサリン・トムソン）と考えられる。

その結果、良い妖精の女王は悪い夜の女王に、悪い魔法使いは善の代弁者としてのザラストロに変更することが決まった。そして、全体の筋書きを整え、フリーメーソン精神を表現する象徴的で楽しい感動的なオペラをつくることにしたと考えられる。

モーツァルトは宮廷的・貴族的な音楽を極力少なくし、民謡（リート）・コラール（合唱）・トルコ風などの多種多様な音楽様式を取り入れて巧みに作曲を進め、この壮大なドイツ語オペラを完成させたのである。

魔笛の小屋　シカネーダーが、ウィーンの自分の劇場の隣に建てた小さな木造の小屋。モーツァルトはここで、「魔笛」の一部を作曲した。現在この小屋は、ザルツブルクにある国際モーツァルテウム財団の庭園に移築されている。

音楽学者のエドワード・デントは『モーツァルトのオペラ』（石井宏・春日秀道訳）で、ザラストロという人物の全人格を創造したのはシカネーダーではなくギーゼッケだとみている。そして、ヒルデスハイマーは、デントの「ギーゼッケがザラストロの生みの親」という考えに賛同し、「われわれは、彼（筆者＝ギーゼッケ）がザラストロの、そして〈魔笛〉の中のザラストロによって代表される領域の考案者であることを疑わない」（渡辺健訳）と述べている。

ザラストロの名は、ゾロアスター教の開祖で伝説上の人物となったザラスシュトラ・スピターマ（ゾロアスターはザラスシュトラのギリシア語読み）から派生したもので、この名前がオペラのなかに取り入れられたように思われてならない。

ジャック・シャイエは『魔笛―秘教オペラ』で、次のように説明している。

「ペルシャの宗教は、その根本教理の一つ、すなわち《善》と《悪》、《善の神》（アフラ・マズダ）と《悪の神》（アーリマン）という二つの原理の二元性を彼（筆者＝ゾロアスター）の教えによるものとしたため、ついに彼は、王＝僧侶の名のもとに、《善》の原理の化身とまで言われるようになった。これがザラストロの由来である。（高橋英郎・藤井康生訳）

＊

「魔笛」はフリーメーソンのオペラではなくゾロアスター教から材料を得たオペラだと強調した人物に作家松本清張がいるが、フリーメーソン精神を表現したオペラであることは明らかであり、世界的にも認められており否定はできないであろう。

しかし、これまで述べてきたように、「魔笛」のザラストロの名はゾロアスターに由来するものである。この点について松本清張も、「魔笛」の賢者であるザラストロの名前は、ザラスシュトラ（ゾロアスター）からきていると指摘した。

また、光（善）と闇（悪）の対立・闘争をベースに、最後は光が勝利を得るという教えはゾロアスター教の根本教理であり、松本清張はこの部分がオペラのなかに取り込まれていると強調した。

この事柄について筆者なりに考えてみると、「魔笛」の成立にゾロアスター教が影響を与えた可能性は極めて高いように思われる。

ただ、この光と闇、善と悪の類似した対立・闘争は、モーツァルトが作曲に関わった英雄劇「エジプトの王タモス」（二曲の合唱と五曲の幕間音楽を作曲）にも見られる。

この「エジプトの王タモス」は、ジャン・テラッソンの小説「セトス」から発想を得て作られた壮大な英雄劇であり、為政者は高徳や公正さなどを持って国民の手本となり行動すべしという啓蒙主義的な考えが表現されている。（モーツァルト：歌劇『魔笛』に関する12章、第３章『魔笛』のルーツ１『エジプト王タモス』）

おそらく、「魔笛」の制作過程で、この光と闇、善と悪の対決・権力闘争の基本構造を受け入れることについて、シカネーダー、モーツァルト、ギーゼッケの三人に異議はなかったものと思われる。

最後に、「魔笛」の夜の女王の拠りどころとなったものは、ヴィーラント編集の『ジンニスタン』に収められた童話、ジャン・テラッソンの小説『セトス』であろう。エドワード・デントによると、夜の女王のモデルは、小説のなかの主人公セトスの継母ダルーカだとされている。

［注］

カール・ルートヴィヒ・ギーゼッケ

ドイツのアウグスブルク生まれ。1781年にゲッティンゲン大学に入学したが途中退学。

1789年に、ヨハン・フリーデルが経営するフライハウス劇場の座員として雇われた。その後、シカネーダーの経営になってからも座員として残った。メルヘン・オペラ「オベロン」など多くの台本を書き、「魔笛」では奴隷の役を演じた。

1800年に演劇の仕事をやめてウィーンを去り、鉱物学を学び鉱山顧問などをして働いた。また、グリーンランドなどで鉱物調査を行ない、後にアイルランドに移住した。ダブリン大学の鉱物学の教授を務めた。

妄想劇「長屋のモーツァルト談義」（天国酒場での放談）

会員番号　K.504　**朝　吹　英　和**

天国に召された横丁の長屋の熊さんからパラダイスメールに添付された酒場での放談会の記録が届きましたので、ご披露させて頂きます。支離滅裂の限りを尽くした内容でございますので、予めお断り申し上げる次第でございます。

熊さん（以下熊）：ちわ～ご隠居さん、お邪魔しやす。こちらに来てから早いもんで１年が経ちやしたが、偶にはいっぺえやりながらお話を伺おうかと思って八っつあんと一緒に参えりやした

隠居（以下隠）：それはそれはお揃いで、まあまあお上がり（ご隠居は天国でもパラダイス・ロング・ハウスなる長屋住まい）

八っつあん（以下八）：ご隠居さん、近頃天国横丁にちょいと粋で美味しい酒場が開店しやしたんで、その店にお連れしようと思いやして、料理は美味いし酒は「大平山」や「刈穂」など旨めえ日本酒から葡萄酒まで揃っている上に女将が美人でしてね

隠：それは結構、早速参ろうとしよう

（酒場にての放談）

熊：ちわ～、女将さん今日はこないだちょっくらお耳に入れた横丁のご隠居さんをお連れしやした

女将（以下女）：いらっしゃいまし

隠：女将さんが下界でご商売なすっていたのはどのあたりですかな

女：江戸は深川でございます

八：ご隠居さん、女将さんは下界では大層な美人女将として有名で、こちらでも予約が取れない店として有名で、モーツァルトさんもよく来られるそうです

女：モーツァルトさんはほんとうに愉快なお方で、手前どもではアマデさんとお呼びしておりますの

隠：ときに熊さん、今日の話とは一体何ですかな

熊：実はそのアマデさんの歌芝居の「コジ」なんちゃらがこちらで物議をかもしましてね、何でも「女子（おなご）差別に反対する会」とか言う団体からアマデさんとポン友のダ・ポンテさんが告訴されたそうで

八：何でもベートーヴェン先生あたりが「儂はモーツァルトさんを先生と尊敬しておったが、不倫まがいの台本の歌芝居はけしからん」と大層なお怒りだそうで、その裁判では原告の証人になったとか聞きやした

隠：左様か、「コジが拗れた」という訳だな。（笑）真面目一筋で正義感と倫理観の人一倍お強いベートーヴェン先生らしい話じゃな

熊：こないだご隠居んとこで「コジ」の音盤を

聴かして貰ったあっしとしては綺麗な音楽が次から次に流れてとても気持ちが良かったんですがね、絵空事の歌芝居にいちいち目くじら立てるなんざ野暮の極みだね

八：熊さんよ、気持ちが良すぎたって熊さんは半分寝ていやしたがね

熊：いやいや八っつあんよ、気持ちが良過ぎて「天国にも登る気分」でな

八：わはははは！何を言い訳して、もうお前さんはとっくに天国住まいじゃよ（笑）

隠：熊さんよ、一本取られたな！近頃は下界でも女子（おなご）差別やら人種差別問題がかまびすしいようじゃな。

八：あっしらのいたお江戸では姦通･不倫は「斬り捨て御免」と言うて死罪でしたな。クワバラクワバラ！

隠：して、その裁判の結果はどうなったんじゃ

八：ご隠居さん、ご安心召され。天国裁判所の裁判長はかの高名な大岡越前守様で何とも明快な判決でござった

隠：こないだはドン･ジョヴァンニ顔負けのワーグナーさんには一部有罪の判決が下ったそうじゃったが

八：よくご存知で、楽劇とかの初演で大変お世話になった棒振り親方の奥方**コジマ**さんと密通して３人も子供をこさえた挙句に恩人の旦那と別れさせちまったらしいとかで

熊：そいつぁ相当な悪（わる）だな

隠：どうも「**コジ**」という名前は物議を醸すようじゃな。ワーグナーさんは確信的な実行犯じゃがアマデさんの方は絵空事と言うて芝居の台本ゆえのことで無罪になったと言う訳じゃな。尤も天国では魂だけなので有罪でも懲役とか禁固はなく名誉に汚点がつくだけじゃが

八：お裁きの「お触れ」には「表現の自由」とありましたな。そういや一刀斎先生が「表現の自由はこうじょりょうぞくに反しない限り許される」とか言うてましたな

熊：何！皇女だと、凌辱だと、とんでもねえや。そいつぁいかんぜよ！

八：熊さんも急に坂本龍馬の若旦那みてえな口のきき方だな。ワーグナーさんの台本では自分の娘さんを歌合戦の優勝賞品にするとか、兄さんと妹が愛し合って子供まで作っちまったとか、神様までが重婚したりでやりたい放題という事も訴状に書いてあったそうな

隠：左様、ワーグナーさんも不倫と言うて人の道に反した罪で有罪と聞いたが、台本についてはギリギリ裁判員の評決が８対７の紙一重で無罪になったそうな

熊：八っつあんよ、「表現の自由」ってのは何を言っても許してくれるって事かね

八：いやな、「公序良俗」ってえと難しく聞こえるが平たく言えば「悪さをしねえとか、人の道に外れる事たあやらねえって」事らしいな

熊：豆腐屋の丁稚の長松（ちょうまつ）どんが「お天道様が見ていなさる」って独り言を良く言っていた

が、おんなじ事だな

八：お天道様と言やあ勘当された木挽町の若旦那が「お天道様と米の飯はついて回る」とか啖呵を切って出ていったそうな

隠：ところが世の中「そうは問屋が卸さねえ」って訳でな、お天道様はついて回ったものの、米の飯はついて回らず、親切なお方の世話でやっと食い繋いだそうでな。世間の篤い人情に感激した若旦那は改心して一念発起、江戸でも一番の噺家になったそうな。苦労した甲斐があって若旦那の人情噺は奥が深かったそうでな

熊：おなじ「どん」でも地獄落ちしたドンとは違って長松どんは立派な心掛けで偉いな

八：光源氏の君や好色一代男で有名な浮世之介なんざ７歳で侍女と戯れた早熟者で、遊女から人妻、後家さんまで手当たり次第の放蕩者で「千人斬り」と呼ばれておったが、ドンの野郎はお供の巻物の目録によるってえと2065人もの娘やら高貴な奥方のお名前が載っているそうな

女：そういやアマデさんが「僕が冗談を言った全ての娘と結婚しなければならないなら奥さんはざっと200人になるな」なんて仰ってましたわ

八：「もて男」だったアマデさんらしいね

隠：儂も気になって「コジ」の台本を調べてみたんじゃが終いには騙された姉妹が元の恋人と一緒になってめでたしめでたしで明るく終わっておったな

八：「**終い**には**姉妹**が」なんてご隠居も駄洒落をかますね

熊：「コジ」なんちゃらは「女子（おなご）はみんなこうしたもの」と言う事らしいが、世の中男と女だけなんだから逆に言えば「男はみんなこうしたもの」って訳だな

隠：熊さんや、中々良い事を言うね。アマデさんの立派なとこは「世の中には表と裏があって色々だが最後は広い心で明るく楽しく生きよう」という話じゃと思うがな

女：おろしや国のショスタコ何とかさんと仰る長いお名前の一寸気難しそうなお方が「音楽会を聴いた人が会場を後にする時に生きていて良かったと思えるような音楽を作るのが理想だ」と仰っていましたわ

熊：何でえそのタコ親父ってえのは

隠：ショスタコーヴィチさんと言うてな、アマデさんやベートーヴェンさんをとても尊敬していなさるお方じゃ

八：タコさんの言う通りで「音が楽しい」と書いて「音楽」、「音が苦しい、音が苦」じゃあいけねえよな

隠：つまり何だな歌芝居も嫌いなら見なければ良いだけの話で、世の中に害を与える訳でもないと言う事じゃ

熊：それにしてもたかが歌芝居で裁判まで起こすとは何だな、「差別差別と大騒ぎする連中こそ差別する心の持ち主じゃ」と一刀斎先生が仰っていたな

八：裁判でアマデさんは無罪になったと聞いた

ベートーヴェン先生がこないだパラダイス劇場で「コジ」を聴きに行かれたそうな

熊：流石はベートーヴェン先生、お心が広いお方だ

隠：して、ベートーヴェン先生のご感想は如何じゃったかな

八：早耳の瓦版の兄さんの話では「下界ではけしからん音楽だと思っておったが、聴いてみて流石はアマデさんだと思った。儂には不真面目な台本で作曲は出来んが、アマデさんの変幻自在な歌芝居の流れはまるで蝶々がひらひら飛んでいるようで楽しかった」とベートーヴェン先生は上機嫌でホイリゲに行かれたそうな

熊：そいつぁ良かったな。裁判を起こしたヒステリックな小母さん連中にも歌芝居を見てもらいてえもんだな。

八：こらこら、熊さんよ、ヒステリックとか小母さんてなこたあ表じゃ言わんほうがためだぜ。(天国では自動翻訳機が普及しており、熊さんもヒステリックなどと発言していた)

熊：合点承知之介だ。今度ベートーヴェン先生とアマデさんをお誘いして女将さんの店でいっぺえやりてえな

隠：それは良い考えじゃ

※「後日談」

熊さんのメールによると、瓦版の兄さんの話として、女将さんの店ではベートーヴェンとモーツァルトは意気投合して話が弾んだとか。また、偶然店の奥座敷に陣取っていたワーグナーと岡本太郎は芸術談義に大いに花を咲かせ、「芸術は爆発だ！綺麗事では駄目だ！」とか「毒のない芸術は偽物だ！」と障子越しに大きな声が聞こえていたそうである。

「いつもポケットに『モォツァルト』」

会員番号　K.551　**浅野目　到**

「クラシックって聴く？」「モーツァルトって知ってる？」「実は今度、モーツァルトの会を立ち上げようと思っていて・・・　～　（この後の熱弁はご想像に・・・）」

忘れもしない加藤明代表のこの囁きからの熱いトークが全ての始まりでした。

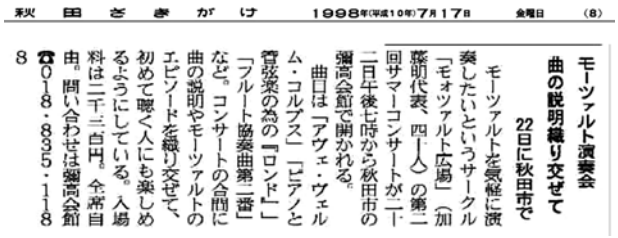
特にクラシックを好んで聴くわけでもなければ、映画「アマデウス」は観たことはあるしモーツァルトって知らない人はいないだろうけれども特に･･･、といった程度の私にとって、「モーツァルトでなくてモォツァルトなんだ。」「広場、というところにちゃんと意味があって・・・」などと加藤代表の畳み掛けるモーツァルトへの

想いに対抗できる術はなく、ただただ圧倒された私は、そのまま新たに立ち上げられた「モォツァルト広場」の会計幹事として発足メンバーに名を連ねることとなりました。

あれから30年。最後のアニバーサリーコンサートに立ち合い、最終号となるであろう会報に寄稿させて頂くことになろうとは、夢の夢にも思い及びませんでした。

随分前ですが私が大学生の頃、面白いから読んでみればと妹から手渡された３巻ほどのマンガコミック本。タイトルは「いつもポケットにショパン」くらもちふさこ作。クラシック音楽を題材とし、主人公がピアノを通じて成長していくといったストーリー。

何気なく読み始めてすぐに引き込まれ、物語に出てくるショパンの曲のＣＤを探して買っては聴き入り･･･という時期がありました。「ショパン広場」だったらもう少し話しができるのになあ、などと考えている間もなく、加藤代表から会員番号はK551をやるから、と言われ、その意味もよくわからないまま身の程知らずにもありがとうございますと受け取ってしまった交響曲第41番「ジュピター」。後でモーツァルト最後にして最高の交響曲だと知り、お借りしたＣＤを聴いてその壮大さに鳥肌が立ち素直に感動を覚えました。さすがに「モォツァルト広場」では難しいと思い、いつか生のオーケストラでの「ジュピター」を聴いてみたい、というのがひそかな願いでした。



秋田さきがけ　1998年(平成10年)7月17日　金曜日　(8)

モーツァルト演奏会
曲の説明織り交ぜて
22日に秋田市で

モーツァルトを気軽に演奏したいというサークル「モォツァルト広場」（加藤明代表、四一人）の第二回サマーコンサートが二十二日午後七時から秋田市の彌高会館で開かれる。

曲目は「アヴェ・ヴェルム・コルプス」「ピアノと管弦楽の為の『ロンド』」「フルート協奏曲第二番」など。コンサートの合間に曲の説明やモーツァルトのエピソードを織り交ぜて、初めて聴く人にも楽しめるようにしている。入場料は二千三百円。全席自由。問い合わせは彌高会館☎018・835・1188

発足当時の新聞掲載：秋田魁新報
（第２回サマーコンサート告知記事 1998(平成10年)/７/17）

幼稚園の頃、カワイ音楽教室でオルガンを習い（当時は先生が幼稚園に来て教えてくれていました。）、白タイツに半ズボン・蝶ネクタイのいでたちで発表会を行った当時の県民会館の舞台は、照らされる強いライトと暗めな観客席がおぼろげながら記憶にある程度で（笑）、その後楽器には縁がなく、本格的な生の演奏を近くで聴く機会などなかった私にとって、年２回のサマーコンサートとアニバーサリーコンサートは大変貴重な場でした。モーツァルトの境遇やその曲が作られた当時の時代背景などのお話しを伺ってから聴くのは極めて贅沢で、スピーカーを通さず飛び込んでくる伸びやかな音色に心洗われる思いでした。

加藤代表には「モォツァルト広場」を通じて様々なご縁をいただきました。加藤さんを通じて多くの方と知り合えたこと、そのおかげで二人の娘がピアノを習うことができたこと、その後吹奏楽部に入り、大会や公演会で様々な学校の演奏が聴けたこと（東北大会も体験できましたが、ダメ金で普門館には行けませんでした。）。そして何よりもモーツァルト～クラシック音楽というものを今までより遥かに身近に感じることができたこと。加藤さんとの出会いがなけれ

ばすべてが無かったものでした。改めて心より感謝申し上げます。

♪♪

音楽だ。わたしのまわりのすべてが歌いはじめた。
時計の音がバッハを奏でる。
おしゃべりはモーツアルトに変わり
ポケットからショパンが聞こえた。

(「いつもポケットにショパン」よりラストシーン)

ポケットに入ったモーツァルトを聴く機会を、加藤さん、形を変えてでも、はたまた他の個性的な音楽家達のレクチャーを、これからもどうかお願いします。

「加藤広場」会計幹事　浅野目　到

酒とモツの日々（最終稿）

会員番号　K.488　**佐　藤　　滋**

いよいよ今回にて52回にわたる長い駄文も終了です。最後に駄文らしく、加藤代表を始めモーツァルトを早熟の天才、偉大な神童、神の奇跡・・・等と崇め奉る愛好家の皆様方へ、無知で愚かな駄犬の後ろ足で、愚かな砂かけをして、ひんしゅくをかってみようかな？

レオポルドという希代の教育パパ、ステージパパがいなかったら彼はどんな天才に育っていたのでしょう。才能が豊かなのは間違いありません。でも、ブラームスやワーグナー、シェーンベルグといった悲惨な環境に育った天才たちも、開花は遅れてもしっかりと芽吹き、社会に影響を与え、長く生きて豊かな実りを残しました。

レオポルド氏が分別のある知識人だったら、せめて常識人だったら、二十歳を越えた息子に母親同伴で就職活動などさせたでしょうか。無論、そこには子育て失敗という現実があったのでしょうが。（そのために母親は旅先でストレスにより死んでしまいます）加藤代表は、その時の息子（モーツァルト）から父（レオポルド）への手紙を涙ながらに語りますが、彼は本当に悲しんでいたのだろうか？口うるさい父親を怒らせない計算はなかったか？この時期、暗い曲もあれば明るい曲だってあります。悲しい手紙のすぐ後に陽気な自慢話が続く。凡人、いや、まともな神経の人には理解できない感覚です。そもそも母親のストレスの一因は息子の女遊びにあったのではないか？

歴史にｉｆは無意味ですが、レオポルド氏がちゃんと子育てに向き合っていたら、それともバッハのように子だくさんで賑やかな家庭だっ

たら、モーツァルトは本来の35歳までに300曲位しか書けなかったかもしれない。でも60歳位までしっかり生きて700曲の作品と幸福な一生、そしてロマン派につながる新しい道を開いた・・かもしれません。

モーツァルトは天才です。でも人間としては失敗作です。

「憧れるのはやめましょう」（大谷選手の言葉） でも、彼は愛すべき作曲家です。

大げさですが、キリストが無残に死んだのは隣人に愛を教えるため。モーツァルトが惨めに死んだのは天才を身近に感じるため。

モーツァルトよりも、まともな人生を歩んでいる普通のみなさん！哀れな我が友モーツァルトの音楽をもっと身近に、そして次の世代の人々へと紹介してあげましょう。憧れよりも親しみを、崇拝よりも愛を。彼の音楽はそんな聴き手を求めているのです。

愚かな駄犬ほど、権威や名声には無縁です。でも与えられる愛には敏感なものです。

皆様に、モーツァルトの貧しい人生と豊かな愛が、生きる力を与えてくれますように。

長らく、ありがとうございました。

第３回サマーコンサート（1999年）
久元祐子さん初登場で、女史を囲んでの一枚

幹事の懇親会での記念写真（2011年１月）

事務局より

2004年の冬号より20年に渡り事務局だよりを書かせていただきましたが、今回で最後となります。あっという間の20年。2004年は秋田市拠点センターアルヴェ、秋田県立武道館が開館した年でした。たくさんの音楽に触れ、たくさんの音楽を聴き、そして演奏してきた20年でした。吹奏楽畑の僕にとって弦楽四重奏を生で聴く機会などなく、初めて聞いたのがこの「モォツァルト広場」。それからモーツァルトのＣＤを買い、弾くことはできないけどピアノ曲のＣＤを買い、トロンボーン吹きの僕にとってモーツァルトを演奏することはないと思っていましたが、アトリオンで「魔笛」を演奏する機会もありました。音楽の幅が広がったと感じたのがこの「モォツァルト広場」でした。多くの方に出会い同じ時を過ごせたことに感謝いたします。またの機会にどこかでお会いしましょう。　　（K575）